

これからの地域社会像を素描する

——人と地域が共に育つ社会——

特定非営利活動法人まちづくり協会 理事長 増田 勝

はじめに

我が国は、人口増加と経済成長を前提とした社会から、人口減少と社会成熟化が進む新たな時代へと移行している。

そのなかで、行政や市場だけでは支えきれない課題が増え、地域社会の役割と存在意義が改めて問われている。

本稿は、このような時代認識に立ち、成熟社会における地域社会の意義を見つめ直し、その原理を踏まえて、人々がより豊かに生きるためのこれからの地域社会像を素描するものである。全体の流れを図1に示す。

第1章 なぜ地域社会は必要なのか

—存在の必然性と成熟社会における意義—

1 なぜ地域社会が必要なのか —存在の必然性—

私たちは、普段、地域社会をあまり意識することなく暮らしている。

家族を持ち、近所で買い物をし、子どもが学校へ通い、高齢者を地域で見守る。災害時には助け合い、祭りや自治会活動を通じて人とつながる。こうした日々の暮らしは、地域社会という基盤の上に成り立っている。

しかし、その「あって当たり前」であった地域社会は、今、大きな転換点を迎えている。

人口減少や少子高齢化、地域経済の縮小、価値観や暮らし方の変化などにより、地域を支えてきた仕組みは大きく揺らいでいる。その結果、人と人とのつながりや地域との関わり方も変わりつつある。

また、情報通信技術の発達により、人々は地域を越えて多様な人々とつながるようになった。

しかし、地域社会は「情報の共同体」ではなく、「暮らしの共同体」である。災害時の助け合いや子育て、高齢者支援、地域交通、身近な生活環境の維持など、人々が暮らしを支え合う営みは、情報ネットワークだけでは代替できない。

地域社会とは、人々が一定の地域空間で暮らしを共にし、互いに関わりながら、地域を育てていく生活の共同体なのである。

人口増加を前提とした成長社会から、人口減少と社会成熟化が進む時代へと移行するなかで、地域社会を取り巻く条件も大きく変化している。もちろん、地域社会は昔の姿へ戻ればよいというものではない。人口が増加し、家族や地縁を基礎として成立していた地域社会と、人口減少と成熟化が進む今日の地域社会では、その役割も仕組みも大きく異なる。求められているのは、変化した社会条件のもとで、多様な人々が関わり合い、新たな地域社会を育てていくことである。

本稿では、その原理と方向性を明らかにし、その延長線上にこれからの地域社会像を素描する。

第1章 なぜ地域社会が必要なのか

↓
地域社会存在の必然性と原理

↓
地域社会が育むもの

↓
成熟社会が求める地域社会

第2章 未来の地域社会像の素描

↓
変化する人・地域・暮らし・未来

↓
未来を支える原理

(コモン・三領域循環)

↓
地域社会を育て続ける仕組み
(多様な主体・地域マネジメント)

図1 地域社会像を考える流れ

表1 地域社会の役割の変化

時代の流れ	人はなぜ地域社会をつくるのか？
地域社会存在の必然性	・人は一人では生きられない。 ・厳しい自然・社会環境の中で存続するために集団をつくり共に生き抜いた。 ・結果、人は集まり、共に暮らし、支え合い、地域社会が形成された。
前成熟社会での必要性	・昔の農山村では、一人で生きられない。 ・山の管理や利用も、祭りの開催や運営も、子育てや見守りも、農作業も共同作業で行われた。 ・皆で支え合わなければ暮らせなかった。だから地域社会が必要であり、歴史的に形成されてきた。
成熟社会での必要性	・孤立、孤独、災害、人口減少、地域経済、子育て、高齢化という新しい課題が発生。 ・新しい視点で地域社会が必要になっている。

2 地域社会の原理 一人はどのように共に生きるのかー

地域社会は、人々が同じ地域に住んでいるというだけでは成立しない。そこには、人と人との関わり合い、互いを認め合い、支え合う営みがある。その積み重ねによって、人々が共に生きる社会は形づくられ、育まれていく。この営みを支えているのが、次の三つの原理であるとする。

第一は、「関わる」ことである。

地域社会の出発点は、人と人との関わりである。あいさつを交わす。地域の行事に参加する。同じ場所で暮らす人として互いの顔を知る。こうした日常の小さな接点の積み重ねが、人と人とのつながりを生み出し、地域社会の土台となる。関わりがなければ、地域社会は単に人々が同じ場所に暮らしているだけの集まりになる。

第二は、「認める」ことである。

地域には、年齢や職業、価値観、生活様式の異なる多様な人々が暮らしている。地域社会は、その違いを排除するのではなく、互いの存在や考え方、生き方を認め合うことによって成り立つ。互いを認めることは、信頼を育み、多様な人々が共に地域を育てる基盤となる。

第三は、「支え合う」ことである。

関わりが生まれ、互いを認め合う関係が育まれることによって、人は困ったときに助け合い、地域の課題を共に解決しようとする。防災や子育て、高齢者支援、地域活動など、地域社会のさまざまな活動は、こうした支え合いの上に成り立っている。支え合いは、初めから求められる義務ではなく、関わりと認め合いの積み重ねの中から自然に生まれてくる営みである。

このように、地域社会は、「関わる」「認める」「支え合う」という三つの原理の積み重ねによって育まれる。成熟社会では、血縁や地縁だけに依存するのではなく、多様な人々がそれぞれの仕方で、こうした地域社会に関わっていくことが強く求められるようになる。

こうした原理に立てば、地域社会とは固定された共同体ではなく、人々が関わり合い、互いを認め、支え合う営みを積み重ねることによって、絶えず変化し育ち続ける存在なのである。

3 地域社会が育むもの

このような地域社会は、単なる生活の場ではない。人々が関わり合い、認め合い、支え合う営みを

通して、人の成長を支え、自治や民主主義、豊かな暮らしを育む場ともなる。

地域では、住民は日々の暮らしや地域活動を通して、人との関わり方や協働を学び、多様な価値観に触れながら成長していく。また、多様な主体が対話を重ね、役割を分かち合い、地域を運営する経験は、自治や民主主義を実践的に学ぶ機会となる。

さらに、人々が互いに支え合い、地域の歴史や文化、自然を受け継ぎながら暮らすことは、安全で安心できる生活を支えるだけでなく、地域への愛着や誇りを育み、心豊かな暮らしへとつながる。

このように地域社会は、次の四つの価値を育む。

(1) 学びを育む

地域は、人と人との関わりや協働を通して学ぶ場である。

子どもから高齢者まで、多様な世代や立場の人々との関わりや、地域の歴史、文化、自然とのふれあいを通して、人や自然との関わり方や社会の仕組みを体験的に学んでいく。地域社会は、生涯にわたって学び続けられる身近な場である。

(2) 自治を育む

地域で暮らすということは、自ら考え、役割を担い、地域を共に育てていくことである。

地域の課題に向き合い、多様な主体が力を合わせて解決に取り組む経験は、「自分たちの地域は自分たちで育てる」という自治の意識を育み、地域社会を支える力となる。

(3) 民主主義を育む

地域社会は、民主主義を最も身近なところで育む場である。

地域には、多様な価値観や立場を持つ人々が暮らしている。その中で、互いの違いを認め合い、対話を重ね、合意を形成しながら地域の課題を解決していく営みは、民主主義を日常生活の中で実践し、学ぶ機会となる。

(4) 豊かな暮らしを育む

支え合いや見守り、地域活動、文化や伝統の継承などを通して、人々は安心して、心にゆとりを持って暮らすことができる。また、人とのつながりや地域への愛着は、経済的な豊かさだけでは得られない心の豊かさや幸福感をもたらすとともに、未来へ受け継いでいく基盤となる。

このように地域社会は、人と人との関わりを通して、学びや自治、民主主義、豊かな暮らしを育む。それらは一人ひとりの成長を支えるとともに、その営みを未来へ受け継ぐ基盤となる。

4 成熟社会が求める地域社会 ―これからの地域社会への展望―

(1) 成熟社会における地域社会の新たな役割

地域社会は、人々が暮らしを支え合う生活共同体として、長い歴史の中で形成されてきた。しかし、成熟社会を迎えた今日、その役割は大きく広がりつつある。

人口減少や少子高齢化、単身世帯の増加、地域経済の縮小、価値観やライフスタイルの多様化を背景に、地域社会を取り巻く環境は大きく変化している。家族や地域のつながりも変容し、従来の支え合いの仕組みだけでは暮らしを支えきれない場面が増えている。こうした課題は、行政だけでも、市場だけでも解決することは難しい。だからこそ、住民をはじめ、多様な主体が地域に関わり、それぞれの力を持ち寄りながら暮らしを支えていくことが求められている。

成熟社会における地域社会には、暮らしを支える生活共同体としての役割に加え、多様な人々が関わり、地域を共に育てていく基盤としての新たな役割が求められている。

（２）「支えられる地域社会」から「育てる地域社会」へ

成熟社会において地域社会の役割が広がるにつれて、人々と地域社会との関わり方も変わっていく。

これまで地域社会は、人々の暮らしを支え、困ったときには助け合う場として重要な役割を果たしてきた。その役割はこれからも変わらない。しかし、人口減少や少子高齢化が進み、地域の担い手も減少するなかでは、一部の人々だけが地域を支える仕組みでは、地域社会を持続していくことが難しくなっている。だからこそ、人々は地域のサービスを受けるだけの存在ではなく、自ら地域に関わり、その営みを支え、地域を育てる主体となることが求められるのである。

ここでいう「地域を育てる」とは、大きな事業や特別な活動ではない。子どもを見守ること、高齢者を気にかけること、地域の清掃や祭りに参加すること、地域で仕事や活動を始めることなど、一人ひとりが自分のできる形で地域に関わり、その積み重ねによって暮らしをより豊かなものへ育んでいくことである。

そして、その営みは住民だけで担われるものではない。事業者、専門家、行政など、多様な主体がそれぞれの役割を果たしながら協働することによって、地域全体へと広がっていく。このように、成熟社会では、「支えられる地域社会」から、人々が主体的に関わり、多様な主体とともに地域を育てる「育てる地域社会」への転換が求められるのである。

（３）成熟社会が求める地域社会

成熟社会が求める地域社会とは、人々が共に暮らす場であると同時に、人々が地域との関わりを通して成長し、地域を共に育て、その営みを次の世代へ受け継いでいく社会である。

そこでは、人々が関わり合い、互いを認め、支え合う営みを重ねるなかで、学びや自治、民主主義、豊かな暮らしが育まれていく。地域社会は、固定された共同体ではなく、人々の関わりによって絶えず育ち続ける存在なのである。

次章では、こうした地域社会観に立ち、「人と地域が共に育つ社会」がどのような姿をとるのかを、具体的に素描していく。

第２章 これからの地域社会像を素描する

第１章では、地域社会の原理と成熟社会における新たな役割を整理した。しかし、地域社会を支えてきた関係や仕組みが弱まり、地域の担い手も減少するなかで、地域社会は持続し得なくなってきた。

いま問われているのは、成熟社会にふさわしい新しい地域社会をどのように育んでいくのかである。それは、地域を維持するためだけではなく、人々が地域との関わりを通して、より豊かに生きられる社会を育てることでもある。

本章では、この問いに応え、これからの地域社会の姿を、人・地域・暮らし・未来という四つの変化から描く。そこでは、人々の関わりからコモンが育ち、暮らし・経済・社会関係が結び付きながら循環し、その営みを通して人と地域が共に育っていく。このような地域社会の姿を描いたうえで、それを支える原理としてコモンと三領域循環を整理し、さらに、多様な主体が地域を育て続ける地域マネジメントのあり方を考える。

１．未来の地域社会像——変化する人・地域・暮らし・未来——

未来の地域社会は、施設や制度によって完成された姿として与えられるものではない。一人ひとりの小さな関わりから新たな場や活動が生まれ、それらが地域や暮らしを変え、さらに新たな関わりを生み出すなかで形づくられていく。そこで、これからの地域社会像を、人と地域が互いに育ち合いながら変化していく姿として描いてみたい。

（１）人が変わる——「支えられる人」から地域を育てる主体へ

成熟社会への移行は、人々と地域との関わり方にも変化を促す。

これまで地域の暮らしは、行政や自治会、地域団体など、一部の主体が中心となって支えることが多かった。そのため、多くの人にとって地域は、サービスを受け、生活する場所ではあっても、自ら関わり、育てる対象としては意識されにくかった。

しかし、人口減少と高齢化が進み、行政や地域組織だけでは暮らしの課題に対応できなくなるなかで、一人ひとりが地域に関わることを意味は大きくなっている。

地域への関わりは、大きな活動や特別な役割から始まるとは限らない。近隣の人に声をかける、地域の催しに参加する、身近な困りごとについて話し合う、自分の知識や経験を地域で活かす。こうした小さな関わりが、人と人との間に新しい関係を生み出していく。

人は、地域に関わることによって、誰かに支えられるだけの存在ではなく、誰かを支え、地域を育てる主体となり得る。あるときは支え、別のときには支えられる。その関係が固定されず、互いに役割を替える。そこに、成熟した地域社会の姿がある。

こうした関わりから生まれる場や活動に参加するなかで、人は自分にもできることに気づき、他者から認められ、新しい役割を見いだしていく。そうした経験の積み重ねが、地域を育てる主体への成長を促し、その意識や行動が新たな関わりや活動を生み、やがて地域社会そのものを変える力となっていく。

（２）地域が変わる——人々の関わりからコモンが育つ

人々の地域への関わり方が変わることによって、地域もまた変わり始める。

地域は、道路や住宅、施設からなる物理的な空間だけではない。そこに暮らす人々が出会い、語り合い、共に行動することによって、人々にとって意味のある場所へと育っていく。

身近な困りごとを話し合う場、誰もが立ち寄れる居場所、空き家や空き店舗を活用した活動拠点、地域の緑を守り育てる活動、子どもや高齢者を見守る取り組みなど、人々の関わりから生まれ、共に育てられる小さな場や活動が、未来の地域社会を形づくる「コモン」^{（注１）}となる。

コモンには、住民だけでなく、地域で働く人、事業者、専門家、行政、地域外から関わる人など、多様な主体が集まり、それぞれの経験や資源を持ち寄る。立場や価値観の違いを越えて対話し、地域の課題と可能性を共有するなかから、新たな活動や協働が生まれていく。こうした地域は、新しい住民や若い世代、地域外の人々にも開かれ、それぞれが無理のない方法で関わることのできる地域社会となる。

地域は完成された状態として存在するのではなく、人々の関わりからコモンが生まれ、コモンが新たな関わりと協働を育む。その循環によって、地域は絶えず育ち続けるのである。

（注１）共有される資源やその共同管理をめぐることは、「コモンズ」という語も広く用いられている。「コモン」「コモンズ」の用語法には、研究分野や論者によって幅があるが、本稿では、共有される物や空間そのものだけでなく、それらをめぐって人々が関わり、共有・参加・協働を通して、人・場・活動・関係を共に育てていくという動的な側面も含め、「コモン」の語を用いている。

（３）暮らしが変わる——暮らすこと・働くこと・支え合うことがつながる

人と地域が変わることによって、日々の暮らしのあり方も変わり始める。

これまで、暮らす場所、働く場所、消費する場所は、それぞれ分けて考えられることが多かった。

しかし、人口減少と少子高齢化、社会の成熟化が進むなかで、家族形態や生活スタイルが変化し地域社会の構造は大きく変わり、地域での暮らし、働き、人と関わることを、もう一度結び直す動きが生まれている。

地域に育まれたコモンでは、このような人々の関わりから、暮らしの課題や地域の可能性に応える活動が生まれる。空き家の活用、地域資源を活かした事業、子育てや高齢者支援など、暮らしから生まれた活動が仕事やサービスへと発展し、人や資源、資金を地域で活かす新たな経済の循環を生み出していく。

こうして、暮らしを支える生活の基盤、人々の活動を支える地域経済、人と人とを結ぶ社会関係が相互に結び付き、循環する。暮らすこと、働くこと、支え合うことがつながることによって、地域は単なる居住の場から、人々が共に暮らしを創造する場へと変わっていく。

暮らしの豊かさとは、物質的な充足だけを意味するものではない。人とのつながりや地域との関わりのなかに、自分らしく生きられる場や役割があることも大切な豊かさである。身近な人と支え合い、地域の自然や文化に親しみながら暮らすこともまた、成熟社会における豊かさなのである。

（４）未来が変わる——地域の営みを次の世代へつなぐ

人々が地域に関わり、共に暮らしを育てる営みは、地域の未来を変えていく。

そして、地域を次世代へ受け継ぐとは、現在の姿をそのまま残すことではない。地域の歴史や文化、自然、暮らしの知恵を大切にしながら、新しい世代が自らの価値観や生活に合わせて、地域をつくり替えていくことができるようにすることである。

そのためには、活動や組織、仕組みだけでなく、人々が地域のなかで培ってきた経験、関係、知恵を受け継いでいくことが重要となる。なぜその活動が始まったのか、どのような人々の努力によって続いてきたのか、何を大切にしてきたのかを語り継ぐことが、次の世代の新しい実践を支える。

若い世代や移住者、地域外から関わる人々は、単なる後継者ではない。これまで積み重ねてきた実践を受け止めながら、新たな関わりや活動を生み出し、地域に新しい視点と可能性をもたらす存在である。そこから新たなコモンが生まれ、暮らし・経済・社会関係の循環も、新しい時代にふさわしい形へと育っていく。

世代や立場を越えたこうした関わりによって、人が育ち、コモンが生まれ、暮らしや経済・社会関係の循環が生まれる。そして、その循環がさらに新しい人と地域を育てながら、地域社会は未来へと受け継がれていくのである。

２．未来の地域社会を支える原理——コモンと三領域循環——

第１節で描いた未来の地域社会は、人々の善意だけで自然に実現するものではない。人々の関わりを育むコモンと、生活の基盤づくり・経済の循環づくり・社会関係づくりを相互に結び付ける三領域循環が、その営みを支える基本的な原理となる。

（１）人々の関わりを育む「コモン」

第一の原理が、コモンである。

コモンとは、共有物や公共施設にとどまらず、人々が出会い、関わり、共に考え、行動するなかで育まれる「関わり場」であり、共有、参加、協働によってその場を育てていく考え方でもある。

公園や集会所、空き家などの物理的な空間だけでなく、地域の行事や見守り活動、学びの場なども、人々が関わり、共に運営することによってコモンとなる。コモンは最初から存在するものではなく、人々が互いを認め、それぞれの力を持ち寄りながら共に育てることによって形成される。

そして、コモンに関わる経験を通して、人々は地域の課題を自分たちの問題として考え、話し合い、共に行動する主体へと育っていく。コモンは、人々の関わりと自治を育み、未来の地域社会を育てる出発点となる。

（２）地域を育てる「三領域循環」

もう一つの原理が、生活の基盤づくり、経済の循環づくり、社会関係づくりという三領域の循環である。

生活の基盤づくりとは、住宅、緑、移動、福祉、防災、公共空間など、安心して暮らすための環境を育てることである。経済の循環づくりとは、地域資源を活かして地域に必要な仕事、スモールビジネスやサービスを生み出し、人、資金、モノ、情報を地域の内外に広げ循環させることである。社会関係づくりとは、出会い、信頼、学び、参加、協働を育み、多様な主体を結び付けることであり、生活の基盤と経済の循環をつなぐ役割を担う。

三領域は独立したものではない。生活の基盤が人々の交流や参加を促し、そこで育った関係が新たな知恵や活動、仕事を生み、その力が再び生活の基盤を豊かにする。こうした循環によって、地域は限られた資源を活かし、変化に対応しながら育ち続ける力を持つ。

（３）コモンと三領域循環が地域を育てる

コモンと三領域循環は、別々の仕組みではない。コモンに育まれた人々の関わりから、暮らしを支える活動や仕事が生まれ、三領域の循環が動き始める。そして、その循環から新たな場や活動が生まれることで、さらに多様な人々が関わり、新しいコモンが育まれていく。

コモンが三領域循環を支え、三領域循環が新たなコモンを育てる。この相互作用によって、人々の小さな関わりが地域全体の力となり、地域社会は育ち続けていく。

３．地域社会を育て続ける仕組み——多様な主体と地域マネジメント——

コモンと三領域循環は、地域社会を支える基本的な原理である。しかし、それらを地域のなかで実際に育て、持続させていくためには、誰が、どのように関わり、どのような仕組みで実践をつないでいくのが重要となる。

担い手の減少や財政的制約が厳しさを増すなか、個々の活動が孤立すれば、担い手は疲弊し、取り組みも途切れてしまう。多様な主体が力を持ち寄り、人々の関わりや地域の資源を結び付け、個々の活動を地域全体の力へと育てていくことが求められる。

（１）多様な主体が共に育てる

これからの地域社会は、住民だけで育てられるものではない。住民、事業者、専門家、行政をはじめ、地域団体や大学、地域外の支援者など、多様な主体がそれぞれの力を持ち寄ることによって育まれる。

住民は暮らしのなかから地域の課題や可能性を見だし、活動の出発点となる。事業者は地域資源を活かした仕事やサービスを生み出し、経済の循環を育てる。専門家は知識や技術を活かし、対話と実践を支える伴走者となる。行政は地域全体を見据え、制度、情報、財源などを活かして、多様な主体の活動を支える。

大切なのは、こうした役割を固定するのではなく、地域の課題や将来像を共有し、対話を重ねなが

ら、それぞれの活動、資源、知識をつなぐことである。小さな実践とその振り返りを重ね、次の活動へつなげていくなかで、協働の経験が地域の力として蓄積されていく。

（２）地域マネジメントが育て続ける

多様な主体がそれぞれの力を持ち寄るだけでは、地域社会を育て続けることはできない。人々の関わりから生まれたコモンを育み、個々の活動や資源をつなぎながら、三領域の循環へと発展させていく仕組みが必要となる。その役割を担うのが地域マネジメントである。

地域マネジメントは、人々や地域を上から管理することではない。地域にある人、場所、活動、資金、モノ、情報、知識などをつなぎ、互いに活かし合える関係を育てることである。例えば、空き家を活用した小さな交流の場が生まれたとする。そこに住民が集まり、専門家が助言し、事業者が活動を支え、行政が制度や情報の面から後押しする。そうした関わりから、子どもの居場所づくりや高齢者の見守りなどの地域活動や新しい仕事の可能性が広がり、生まれていく。

一つのコモンを起点に、社会関係が育ち、暮らしを支える活動や仕事へと展開することで、三領域の循環が動き始める。地域マネジメントは、こうした小さな実践を人や資源と結び付け、地域全体の力へと育てていく。その際、地域の課題と目指す方向を共有し、担い手を支え、新たな参加者を迎えながら、個々の活動を結び付けていくことが求められる。さらに、地域の内外の資源を活かし、実践から得られた経験や知恵を次の活動や世代へつないでいく。

こうした地域マネジメントは、特定の組織や専門家だけが担うものではない。住民、事業者、専門家、行政などの多様な主体が、話し合いの場や活動をつなぐネットワーク、地域資源を活かす仕組みなどを通して、それぞれの力を持ち寄り、共に実践していくことが大切である。

人々の営みを支え、小さな実践を地域全体の力へと育て、経験と知恵を未来へつないでいくためにこそ、地域マネジメントが必要なのである。

ここまで描いてきた未来の地域社会像とは、完成された地域の姿ではない。人々が地域に関わり、地域を育て、その営みを通して自らも成長し続ける社会である。だからこそ、「人と地域が共に育つ社会」を、私たち自身が選び、育てていくのである。そして、その過程とその延長にそれぞれの新しい地域社会像が築きあげられる。人口が減少し、人材や地域経済、生活基盤をめぐる条件が厳しさを増しても、人がより豊かに生きたいと願い、他者と関わり、地域を育てようとする営みへの信頼こそが、地域社会の未来を支える希望なのである。

【参考文献】

1. デニス・ガボール著（林 雄二郎 訳） 「成熟社会—新しい文明の選択」 講談社 1973.04.20
2. エリノア・オストロム著（原田禎夫・齋藤暖生・嶋田大作 訳） 「コモンズのガバナンス—人びとの協働と制度の進化—」 晃洋書房 2022.12.20
3. 増田 勝 著 「成熟社会におけるまちづくりの構造—共有と協働に基づく地域運営の相互循環モデル—」 建設マネジメント技術 2026. 6 月号